

第25号
Vol.9-1
2012年5月1日

Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人瑞泉内
TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>
現地事務所: 8-B Lorong Bukit Lima Timur 2D, 96000 Sibu, Sarawak, MALAYSIA
発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 TEL&FAX: +60-84-21-7864 E-mail: kenkn@tm.net.my



自然の営みの中で育まれる笑顔

撮影者 中澤 健

日本から来た若者たちが、食事の度にカメラを取り出して写真を撮る。珍しい食べ物だからかと思っていた。が、それだけではないらしい。日本に居ても、食事、行った場所、会った人、その人との関係や体重、血圧などの健康状況も、いわば生活の諸側面の記録保存が流行っているとか。「ライフログ」というそうだ。いわば個人の立体的な伝記のように、行動、体験を手際よく記録保存するサイトに人気が集まっているという。

私は子どもの頃から日記を付けてきた。思いを綴っていたものがやがて行動の記録になり、心の内は付けたりになった頃、手書きがワープロに替わりフロッピーディスクに記録した。やがてパソコンになり、もう何年になるか、もっぱら8ギガのメモリースティックに記録してきた。この2月、パソコンと記録のスティックが泥棒に盗まれた。残念である。人生の一部がえぐり取られたように寂しくもあり、実際に不便で困っている。

今日の記録を残したい思いは、今日を生きた証でもある。アナログとデジタル。意味は同じだろうか。ひと文字ずつ手で書く日記よりずっと便利だ。一時的現象でなく、今後も続くだろう。情報と記録装置の革命。写真の交換や一言メモのような「ツイッター...」。携帯やメールの通信革命も併せて空想小説の世界にいるようだ。じかに触れ合う温もりも忘れずに、この便利になった時代が穏やかに平和に続けば良いと思う。(健)

マレーシアと日本で考える外国人労働者との共生



ヌンバック村・移民の子どもたち

経済発展めざましいマレーシアには、隣国のフィリピンやインドネシアから多くの労働者が流れ込んでいる。特にサバ州には、フィリピン人労働者が100万人いるといわれており、その中には、不法滞在者も多数いるという。

私は、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター「ボルネオプロジェクト」の担当教員として大学生とともにサバ州のフィリピン人移民を支援(?)している。活動地は、コタキナバルの移民集落ヌンバック村。年に2回、8月と2月にそれぞれ3週間、約15名の学生が現地を訪れている。

サバに来ているフィリピン人の多くは、バジャウという民族だ。彼らは「漂海民」とも呼ばれており、海の上で暮らしながら、昔から国境をまたいでマレーシアとフィリピンを行き来していた。海岸に水上集落を作ってマレーシア人となったバジャウもいる。それが近年、マレーシアの労働需要増加に伴って流入数が増えているのである。

活動を始めた2005年は、集落の海岸に堆積する生活ゴミの問題に取り組んだ。しかし、村人にとってはゴミ問題は優先順位が低く、お金や労力をかけようとする人はほとんどいなかった。残念ながらゴミ活動はとん挫し海岸のゴミの層は厚くなり続けている。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
「ボルネオプロジェクト」岩井雪乃

2010年からは次に取り組む課題を模索しているが、どのように「移民」「外国人労働者」を支援できるのかそのビジョンをつくるのに混迷している。

現在は好景気なので、移民にも仕事はある。多くは建設労働や店の店員などで、不安定な雇用ではあるが、それでも村人の生活がどんどん豊かになっていくのを私たちは見てきた。活動を開始した当初は、水道も電気もなく、夜はランプを使い、水は陸の丘の上までくみに行っていた。それが、今では電気が各家庭にあり、水道も村のあちこちにある。携帯電話をみんな持っているし、マレーシアの公立学校に通う子供も多い。大画面テレビや豪華なオーディオセットを持っている家は増え続けている。貧しく政情不安定なフィリピン南部よりも、移民してきて「成功」しているように見える。

コミュニティや家族のつながりも、日本よりずっと強い。子どもは自分の家でも隣の家でも行き来しているし、親せきが入れ替わり立ち代わりフィリピンからやってきている。移民であることで差別をうけるだろうが、彼らのコミュニティ内で助け合う仕組みはできているようだ。

このような村の状況に、私たちボルネオプロジェクトが、「支援」できるようなことはあるのだろうか？

突破口を見つけるために、日本の外国人労働者について勉強している。日本も、1989年の出入国管理法の改正以降、日系ブラジル人

労働者が多数流入し、日本のあちこちにブラジル人コミュニティができた。彼らの状況は、マレーシアにおけるフィリピン人コミュニティとよく似ている。まったくの「外国人」ではなく、日系という歴史的関係性があること、夫婦と子供の家族単位で移住してくるところなどは、フィリピン人と共通する。

日本のブラジル人も、景気のいいうちはよかった。しかし、2008年のリーマンショック以降、問題が顕著するようになった。ほとんどが「派遣」だったため、真っ先に派遣切りにあった。失業者はブラジルに帰国していったが、帰ってからの生活も楽ではない。再就職先が見つからない。日本では工場の単純労働に従事していたため専門技能がない。日本並みの賃金が得られない。といった状況になっているという。

マレーシアのフィリピン人は、どうなるだろうか？景気が悪くなったとき、仕事を失ってしまう可能性は高い。その時、フィリピンに帰って生活できるのだろうか？ そうならないようにするならば、マレーシア語を覚え、学校へ行き、よい成績を取ってマレーシア人と同じように正規雇用されるようになる道がある。そのことを、私たちは支援すべきなのか？それは多文化共生なのだろうか？現地に「同化」していくことではないだろうか？彼ら自身の文化や言語は失われていくのだろうか？

このように、マレーシアの移民のことを考えていたら、日本の外国人労働者の受け入れ方を考えるようになった。どちらも正解があるわけではない。どんな社会のあり方がいいか、移民の人たちの声をききながら、学生とともに模索を続けたい。

東日本大震災 Tシャツ支援活動

クアラルンプール在住
佐藤 英代

1999年9月21日午前1時47分、台湾中部大地震が起きました。中心は台湾の中心、南投県でM.6という台湾では20世紀で一番大きな地震でした。私が住んでいたのは隣の県である台中県台中市でした。その日、私とルームメイトは、たまたまベットに入らず、インターネットをしていて、揺れを感じた時、プチッと音がして電気が切れ大きな揺れを感じました。私はとっさに机の下にもぐり、大きく揺れる机を両手で押さえました。揺れがおさまり、貴重品だけ持って外に出ました。一番近くて安全な場所である運動場に身を寄せました。運動場に着くと大勢の人が避難していました。ラジオを持っている人に状況を聞きかなり大きい地震だということ。日本の家族がテレビをつけたら、パニックになるだろうと思い、朝5時に自宅に戻り、すぐ家族に電話しました。「テレビをつけたら、大変な画像が映ると思うけど、私は生きているから、これから電話も繋がらなくなるだろうから連絡できないけど、心配しないで」と電話を切りました。それから数日間、家族と連絡がとれなくなりました。余震が何度もあり、半年間眠れない日々が続きました。

そして去年3月11日、東日本大震災が起きました。母の実家は福島県郡山市、祖父の実家は宮城県岩沼市、祖母の実家も宮城県でした。親戚中が東北に住んでいるので、テレビの映像を見た時、言葉がでませんでした。津波が襲ってくる岩沼市の映像、そして東京電力の爆発事故、埼玉の実家に連絡をとれたのがその日の夜でした。1人で住んでいる郡山の祖母にも電話をかけ、「怖かったよ、神棚も落ちてきて、戸棚の食器が全部割れてしまったよ。」と泣いてい

ました。それから、父が1週間かけて親戚と連絡をとり、全員無事であったことを確認し、胸をなでおろしました。

地震直後、ユネスコに勤めている友人Kからメールをもらいました。カンボジアに出張中でスタッフと一緒に震災支援のTシャツを作るということ、Tシャツの後ろのデザインに世界の言語で応援メッセージを書くので、中国語で「フレーズ作って欲しい」と言われました。メッセージを書けるほど私の中国語は上手ではないので、私の元学生に頼みました。以前Kの日本の実家にホームステイしたことがあり、喜んで引き受けて



大人用 Tシャツ 黒(表・裏)

くれました。

去年、帰国した時にKからTシャツを受け取りました。様々な言語で書かれた応援メッセージはとても素敵でした。「このTシャツ、マレーシアでも売りたいんだけど、カンボジアから取り寄せられる？」と聞いてみました。「カンボジアではもう作らないので、マレーシアでTシャツを作ってみたら？」とKが答えました。

今年に入り、中国語のメッセージを作ってくれたKに相談しました。Kは美術の大学を卒業しているので表のデザインを描いてくれると言ってくれました。その後、友人から3月11日にクアラルンプールのジャバングラブで古本市があると連絡がありました。古本の売り上げは被災地への義捐金にな

るといふこと、その場所を借りてTシャツを売ってみたいかと誘われました。3月11日にTシャツが売れるなら善は急げ！と印刷屋を探し、前日10日に出来上がりしました。

1ヶ月経った今、Tシャツは約230枚売れました。大人のTシャツは白と黒があり、去年ユネスコがカンボジアで作ったものを私が少しアレンジしてくれました。そして今年は、新たに子供のTシャツを作りました。これKがデザインしてくれました。

私は小さい頃から東北の物を食べて大きくなりました。そして旅行に行くのはいつも福島でした。

自然が豊かで人が温かくて大好きなところです。海外に住んでいて被災地の方の声を聞けない分、被災地を応援する気持ちをTシャツに託して、マレーシアから支援したいと思っております。(協力して頂ける方がおりましたら、ご連絡頂きたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。)

Tシャツを買って被災地の子どもたちの応援をしよう！被災地では就学が困難となった子どもたちが7万3,000人以上います。このような子どもたちが一人でも多く安心して学べるよう、日本ユネスコ協会連盟の行う「ユネスコ協会就学支援奨学金」にご協力ください。

<http://www.unesco.or.jp/kodomo/>
大人Tシャツ(黒・白)

S(婦人) M(婦人) M(紳士)

L(紳士) XL(紳士)

子供Tシャツ

28(3-5歳) 30(6-8歳)

32(9-11歳)

Rm 30. (マレーシア)

¥1000. (日本)

連絡先 佐藤英代

satchurayo@hotmail.com(マレーシア)

カンポン(村)コンペティション

中澤 和代

日本では、国として、または、民間で、地方文化の継承育成に、どれ程の力を注いでいるだろう？今号では、マレーシアで、住居形態、伝統を大切にしながら、その保存と発展に官民が一体となり工夫している姿をお知らせしよう。

昨年9月に私たちのロングハウスで大々的なイベントがあった。これは政府主導のロングハウスコンペティションであった。イバン族は、ロングハウスという住居形態を基本としているため、ロングハウスコンペとなるが、他の民族や村では、異なる住まい方を基本とする。同じ少数民族でも、カヤン族とか、ピダニュー族、それぞれ建築様式や民族衣裳も異なる。マレー系では、マレースタイルのカンポン(村)と集落や住居というように、競う内容は、ポリシー、伝統、住居(設備、清潔度)、教養度、教育等々。あらかじめの予定日に政府の各セクションから選ばれた人々が訪問。いくつかの項目をチェックし、チェック項目のみならず、それぞれの評価を持ち帰って、政府の様々な部門の代表者間で協議するらしい。最初は、①シブ地域内で、②次にサラワク州内で競う。最後は、③マレーシア国内での競争となるらしい。しかも、①で選出されれば、そのロングハウスに報奨金がでるらしく、そのお金でさらなる環境整備が可能となる。我がロングハウスの住人はみんな頑張った。何日か前からゴトシロヨン(共同作業)で、草刈りや周囲の清掃をし、内部は各家が責任を持ってきれいにした。当日は、男性も女性もよそ行きの衣類を着用。特に女性は、バジュ・クバヤというマレーシアの正装である。トゥアイルマ・マイケルが「和代は和服を着るように」とのこと。何故、和服？つまり、このロングハウスは、単一民族ではなく、一つ屋根の下にイバン族、中国系、マレー系、そして日本人も共に住み、社会的活動を行うインターナショナルなポリシーを示すためでもあった。お迎えは、住人みんなの握手。得意のイバン音楽とダンスで場を盛り上げ、その

後は、訪問者が、各家の内部を見学、はからずも最初に我が家の見学となり、慌てふためいた私、1階部分だけではなくシャワールームや2階の寝室、1部屋だけの和室も見学の対象に。緊張する私に代わって、積極的に説明をするロングハウスの重鎮J氏。和室にかけてある掛軸(母の筆による徳川家康の言葉)がJ氏の説明により我が家の家訓となったのには驚いた！そして、訪問者は内部をカメラにおさめ、次へと進んだ。その後は気の向くまま、自由に各家を出入りしていたように思う。また、銀行勤めのL氏が、ロングハウスについてのパワーポイントをした。加えて、RCSのMuhlibehセンターを紹介。長い廊下で、織りのデモンストラーションも。全てトゥアイルマの発案である。

結果は？先頃、発表され、シブ地域で我々のロングハウスがNo.1となったそうである。そしてサラワク内決勝戦が4月17日と決まり、みんな再び張り切った。9月以降、葉保管倉庫、門脇のセキュリティ小屋がゴトシロヨンで新たに建築された。私は、パワーポイントを頼まれている。ウィークデイなのでL氏(銀行員)が職場を休めないからである。どうしよう！後は17日以降に持ち越し。

☆☆☆☆☆☆

4月17日の朝、ロングハウスのルアイ(長い廊下)は、準備万端である。中心の舞台は、色とりどりの風船で飾り付けられ、No.1のトロフィーと認証書を展示。他にもミニミュージアムとして、伝統の衣裳の飾りや織物、天然素材の敷物や籠(いずれもロングハウスのお年寄りの手作り)、昔、使用していた、木の鉢と棒の精米器などがところ狭しと並べられ、その端には、Muhlibehセンターの作品群も、このコミュニティーの活動として位置付けされていた。

午前9時過ぎ、20人あまりの審査員(州行政、各セクションから選出された人たち)が到着。先ず華々しい爆竹でお迎え。やがて国歌が荘厳に流れ、次にイバン音楽の演奏に代わった。次々とルアイに

入る人を握手で迎える人々(住人)は礼儀正しく気持ちのよい笑顔。イバンの正装を身につけた男女とイバン音楽に先導され、ルアイの端から端まで16軒の前を列をなして歩き、前回と同じく、我が家に入る。J氏が日本人の存在と日常生活、日本人の生活様式を説明。ただ、そこに立っているだけの私は、みんなの要求に応じ、臨時の写真モデルになる(ああ、もう少し、若くて、美しければよかったが…、申し訳ない気持ち)。

廊下中央に戻った一行は、双方の挨拶のあと、トゥアイルマ・マイケルから、このロングハウスの詳細説明を受けた。この時が、不承私のパワーポイント操作。ただの操作ではあるものの、言葉がマレー語であるため、私は、説明の終わりと次への移行を知るため、必死でマイケルの口元と表情を見つめつつ進行させた。1時間あまりの説明が終わった時には、汗びっしょり！無事に責任が果たせたのだろうか？

今回、サラワク州コンペを通じて学んだことは、設備や教育の程度に勝るものとして、そこで暮らす人々の文化や伝統。トゥアイルマを頂点として団結する住人のホスピタリティが人の心を和やかにするという事実である。この心地よいロングハウスに出会えた私たちは幸せだとつくづく思った。

昼食後、みんなで、マレーシアのポチョポチョダンスを楽しみ、一行は、ロングハウスの人たちに見送られて帰って行った。結果は6月始めに出るだろうとのこと。

もし、こんな企画が日本にあればコミュニティはどうなるかな？



ルアイをイバダンスで先導する

ACS だより ベナン在住 内海 明美

☆☆ 年をとるとということ☆☆



Raziahさんの日々

Raziahさんは43才(ダウン症)。3年前から作業中、次になにをするのか動きが止まるのが観察されました。叱咤激励を受けても次の行動を忘れがちになり、何をどうしたらいいのかうろたえることが多くなりました。次の年は物忘れが加速されてきました、同時に愛着行動というか一緒にいる人に対して指示を出し、やってもらいたい行動がみられました。この時点で彼女の現状把握の共通認識をもちたいと職員ミーティングのときに話し合い、また彼女の全体像

をレポートし、個別のプログラムの必要性を報告しました。昨年からは、作業開始後1時間もすると「Balik, balik(帰る)」というようになり、さおりの織り機に座って作業していたのが、立ち上がり窓側に立ち尽くすことが多くなりました。声かけし、そばに座って安心させ仕事を継続することができていたのが、昨年9月ごろから「Tidak malu(いやだ、やりたくない)」と作業を拒否する行動が出てきました。今年に入り、作業を1日から半日にして、彼女の好きなこと、できること、エクササイズなどを組み合わせた個別のプログラムで取り組んでいました。2ヵ月後には作業中笑顔が見られましたが、3月末には朝のミーティングに参加したくない、織り機はいや、糸つなぎをかろうじてやるが「Tidak Malu(嫌!)」ということが多くなり、ピーズ通し、エクササイズ(散歩など)を続けています。同時にお茶の時間、食事の時間に

なると、これも「Tidak Malu Malan, Minum(食べたくない、飲みたくない)」とホールに行くことを拒否しはじめました。彼女が食べられるものを見せて誘うと来ることありますが、作業所ではトイレにもほとんど行かなくなりました。それとなくたずねてもいいやだといひます。家庭訪問で母親は、手がかかるようになった、トイレも自分では難しい、休ませたいが作業所に行かないと障害者手当Rp300がいただけなくなって生活にひびく、と話しました。彼女の願いは何なのか?年若い両親と3人の静かな家庭の中で、ブランクにゆれてすごすのがいいのか?職員は、家庭にいるだけでは社会性や作業所の仲間との関係性、ひいては刺激がなく加齢が進み、痴呆が進むのではと考えますが彼女は現時点では掃りたいを繰り返します。散歩で見せる笑顔、車の中で歌う姿を見ているものには、退行現象の速さに驚くばかりです。



RCS はいま 中澤 和代

☆☆☆ ひよこの誕生 ☆☆☆

Mahitahセンターでは、スタッフのMelakaさんがつくった立派な鶏小屋(5つ星と言われている)があり、ここで、30羽ほどの鶏を飼っています。

Mahitahセンターを開設した頃から、何をするか、メンバーに何が必要かについて、毎週金曜日のスタッフ会議で話し合いつつ、いろいろなことを決めてきました。その一つに「自分たちの手で玉子を!」という意見が出ました。目的は、栄養状態の改善です。時にはお肉も。そして、何よりもメンバーがひよこから育てることによって、情緒的にも豊かさが得られると考えたのです。イバンの人たちが鶏を飼うのは、どこの家庭でも日常的なことで、導入しやすいことも理由の一つでした。私たちは、街のお店でひよこを買い、メンバーと一緒に餌をあげ、育ててきましたが、玉子については、ほんの少しだけ。成功とは言えない

状況でした。昨年、スタッフからローカルチキンを飼ってみよう、という提案がありました。鶏を飼い始めて丸3年が過ぎた頃です。

最近、そのローカルの鶏グループが卵を産んで、自分の体で卵を温め始めました。そして、ついに可愛いひよこが生まれたのです。お母さん鶏は今、可愛い子どもたちを、一生懸命、守っています。私たちは子育てを邪魔しないように、そっと見守っています。今は別の親鶏が、別の場所に自分の落ち着く場をつくり始めています。鶏お母さんは、自分のお腹の中の卵がなくなるまで、毎日1個づつ、卵を産むそうです。そして、全部産んでしまったら、自分の体を卵の上に置き、生まれるまで、温めるそうです。どうして、自分のお腹にもう卵がないとわかるのでしょうか?また、鶏お母さんは、人間に、はじめから、卵を産む場所を準備されるのは、嫌いだそうで

す。産み始めの卵が1個か2個の時期の気持ちに沿うように、そっと場をつくってあげると、そこを産み場所と決めるんですって!

スタッフJennyの提案で、ひよこが無事生まれたら、みんなでバーベキューパーティーをしよう!ということになっています。ひよこの誕生祝いなんて、とても素敵ですよ。Mahitahセンターはいつも楽しく、自然の中で、豊かな日常を過ごしています。



ひよこを守り育てる鶏お母さん

じやらんじやらん ちゅちゅり がわん♪ (25回)

本当に釣りするのかな?~カニクイザル

上杉 誠

ボルネオは大自然の宝庫。海で囲まれた大きな島ですので、ジャングルから海まで様々な環境があり、そこで暮らす生き物たちも環境に合わせて様々な姿をしています。

ボルネオのような熱帯域では、森と海が一体化したマングローブの森が、川の河口を中心に陸地と海をつないでいます。マングローブは生き物たちの宝庫、なんといっても海と森の両方の性質を持っています。海の魚なのに、森の虫を食べるテッポウウオや森の鳥なのに海の魚を食べるカワセミの仲間など、それぞれに海と森をうまく利用して暮らしているのです。

サラワクでも、バコ国立公園のような海沿いの公園ではマングローブの森が広がっていて、様々な生き物たちの暮らしぶりが驚くほど近くで観察することが出来るのです。特にバコ国立公園はサルたちの楽園。ラングールやテナガザルの仲間などのサルが普通に見

られるのです。そんな中でも一番多いのが「カニクイザル」。いかにもおサルさんといった姿をしています。その一番の特徴は長いしっぽにあります。ほぼ自分の体の長さと同じくらいのしっぽを持っていますが、ちょっと長すぎませんか?と心配になってしまうくらい。この長いしっぽ、なんでここまで長くなってしまったのかと言うと、なんとこのサル、長いしっぽでカニを釣るんだそうです!海沿いに棲んでいて、カニを食べるサルだから「蟹喰猿」。非常にわかりやすい名前ですが、本当にしっぽを使ってカニが釣れるものなのでしょうか?確かに長いしっぽをマングローブの枝から垂らしている姿は、まるで釣りをしているようにも見えるのですが…。

このカニクイザル、バコ国立公園では、普通に見ることが出来ます。マングローブ沿いだけではなく、いたるところで遊んでいて、時にはちっちゃな赤ちゃんがお母



尻尾の長いカニクイザル

さんに甘えていたり、子供たちだけで遊んでいる姿はとっても和やかな気分させてくれます。

本当にカニ釣りをしている姿は今のところ正式には観察されていないようですが、サラワクにお越しの際は、本当にカニを釣っているのか、ぜひとも検証してみてください。大発見ができるかもしれません。

Island Jalan dari Kuching はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

2012年ACE総会：6月23日(土)南青山会館13.00より 参加費2,500円(含 交流会費)

ACEに入会のお誘い

*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会(ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナン社のMCSとサラワクのMCSの活動を支援しています。

*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 1.5万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

編集後記

- 震災後のこの1年、原発事故も含め、復興への道のりは、まだまだ長い日々だと思われまふ。被災された方々に、せめて、春が希望につながるように、と祈ります。桜の花びらが舞う季節、その美しさを思い浮かべながら、同時に、世界で起きている様々な問題の厳しさにも気持ちが揺れます。最近、文芸春秋3月号の「日本の自殺」という横を読みました。これが37年前に発表されたものとなり、先人の言葉に真摯に耳を傾けたいと思っています。

(Kazuyo)

- 今日2012年4月18日です。あれは1960年の今日、歳か日曜日の朝の便で成田空港を立ち、マレーシアにやってきました。つまり今日から、マレーシア20年目に入るという訳です。楽しいばかりではありませんでしたが、何時でも必ず助け手が現れました。お一人お一人に感謝すると共に、与えられた健康と活動を神様に、深く頭を垂れ感謝しないではいられません。

(Ken)